

私の一冊

歯科衛生学科 野口 有紀 先生

中室牧子 著 『「学力」の経済学』

小鹿・谷田図書館 371.3/N37

「ご褒美で子どもを釣ってはいけない?」「ほめて育てるべきなのか?」など科学的根拠から明らかにしており、教育での思い込みに一石を投じている本です。教育では、個人の経験値などに基づいて主張される場面が多く、違和感を拭えないことが多々あります。どうして、それが正しいのか納得できる説明がなされないケースがみられます。

この本の中で、ご褒美と学力の面白い実験が紹介されていました。「テストで良い点を取ればご褒美をあげるグループ」と「本を1冊読んだらご褒美をあげるグループ」では、どちらが子どもの学力を上げる効果があったかというものです。効果のあったグループは、「本を1冊読んだらご褒美をあげるグループ」でした。それはどうしてなのでしょう?子どもたちがご褒美に対して、どのような行動をとったかがキーポイントで、ご褒美に対し何をすべきか具体的な方法を示すことが学力を上げることに大切だからなのです。勉強のやり方を示すご褒美設定をするほうが、結果を重視するより良いということです。面倒がらず、具体的な方法をわかりやすく示していくことが重要だと思いました。これは教育の現場だけでなく、他にもいえることなのではないでしょうか。例えば、今話題になっていますラグビー日本代表チームも当てはまるように思いました。エディージャパンでは、ラグビーワールドカップでベスト8になるためにがんばろうではなく、ベスト8になるために何をすべきかについて各選手に合った具体的トレーニング方法を示し、行っていました。結果は皆さんのご存知の通りです。

また、この本では「自制心」や「やり抜く力」も取り上げられています。認知力(IQ や学力など)だ

けでなく、非認知力(誠実さ、忍耐強さ、社交性、好奇心の強さなど)が人生に大きな役割を果たしているということについても、データを用いて説明しています。著者は、『学校とはただ単に勉強をする場所ではなく、先生や同級生から多くのことを学び、「非認知能力」を培う場所』と述べています。学力や知識も大切ですが、社会では「自制心」や「やり抜く力」など「非認知力」が大切だと実感します。

この本で述べられていることを、教育の現場や子育てだけでなく、職場、家庭、グループ団体など様々な場面に置き換えて考えることができます。評論家や専門家の意見、経験談に耳を傾ける前に、この本を読んでもと納得ができ、物の見方が変わるのではないのでしょうか。